

## 洋楽導入期輸入ピアノの軌跡

— 一八六五年アメリカ製グランドピアノを事例に —

川 俣 正 英

はじめに

茨城県立歴史館の敷地内にある旧水海道小学校本館では、「明治から昭和初期の教育資料」のテーマで、(一)明治から昭和初期の小学校で使われた教科書を中心とした教育資料、(二)水海道小学校関係資料、(三)グランドピアノの三部門による展示が行われている。ここで展示されているグランドピアノは、昭和七(一九三二)年に水海道尋常高等小学校(現、水海道市立水海道小学校)で購入され、昭和五〇年に水海道市から茨城県歴史館(現、茨城県立歴史館。昭和五六年から現称)に寄贈されたものである。

筆者は、旧水海道小学校本館で展示されているグランドピアノ(以下、水海道小ピアノという。写真<sup>1</sup>)の来歴について、講座や演奏会<sup>2</sup>で紹介してきた。本稿は、その後の調査も含めて、水海道小ピアノの製造から今日までの歩みを紹介する。また、その関連で日本におけるピアノの導入・普及状況、ピアノの普及からみた茨城の音楽教育の歩みの一端をも合せ

て窺うものである。

水海道小ピアノについては、これまで、松山陸郎<sup>3</sup>と石塚眞<sup>4</sup>が紹介したり、新聞で報道されたりしている。

日本におけるピアノの普及や製造の歴史については、堀成行<sup>5</sup>が近世から近代までを体系的に調査し、泉清<sup>7</sup>が日本のピアノメーカーや調律師などを紹介し、笹沼恵美子<sup>8</sup>が音楽取調掛におけるピアノ伝習を考察し、塩津洋子<sup>9</sup>が関西における明治期のピアノの受容の実態を追求している。また、松山陸郎<sup>10</sup>、礪田耕治<sup>11</sup>、戸塚亮一<sup>12</sup>、大宮真琴<sup>13</sup>、西原稔<sup>14</sup>の各著書、ピアノについて全般的に取り上げた事典<sup>15</sup>、音楽情報にもその記述がある。

日本に現存する個別のピアノの来歴については、田中助一<sup>17</sup>がシーボルトのピアノ<sup>17</sup>を、五木寛之<sup>18</sup>がステッセルのピアノ<sup>18</sup>をそれぞれ探求している。茨城県内では、常澄村立大場小学校<sup>19</sup>(現、水戸市立大場小学校)が、同校所蔵ピアノの来歴を紹介している。



写真1 1865年アメリカ製グランドピアノ

一八七二(明治四年)四月二日、ハーバー夫人が購入し、横浜に向けて送った。しかし、ハーバー夫人のピアノ購入及び横浜への輸送の目的については、スタインウェイ&サンズ社の記録には記載されていないため不明である。さらに、ハーバー夫人の人物像も不明である。そして、水海道小ピアノは、横浜に到着したものとされるが、後述

水海道小ピアノは、アメリカ合衆国ニューヨーク市のスタインウェイ&サンズ社からの回答(資料1)によれば、一八六五(慶応元年)七月二十五日に製造された。製造番号は一一〇一三で、スタイル一のグランドピアノである。材質はローズウッド、サイズは六フィートハインチ(約二〇

## 一 水海道小ピアノの製造と輸入



STEINWAY & SONS

Steinway Place, Long Island City, New York 11105 (718) 721-2600 Fax: (718) 932-4332

April 7, 1992

Mr. Michio Nakamura  
H. Matsuo Musical Instruments Co., Ltd  
Central P.O. Box 1630  
Tokyo, Japan

Dear Mr. Nakamura:

Thank you for your recent request for serial number 11013.

According to our records, this piano is not a Model C grand, but rather a "plain grand, style 1". The piano was manufactured here in New York and completed on July 25, 1865.

Our records indicate however, that this piano was originally purchased by a Mrs. Harper and delivered to Yokohama, Japan on April 13, 1871, and not in 1865 which was previously noted. Our records do not explain why the piano was sold six years after its manufacture. The piano would have been delivered to Japan by ocean vessel from New York harbor.

The style 1 grand was finished completely in rosewood and was 6 feet and 8 inches in length. It incorporated the tubular metallic action frame, double escapement action, with richly carved legs and lyre. It was commonly referred to as the "patent" grand and had only 85 notes in the keyboard.

The original retail price for this piano would have been approximately \$1,175.00.

I trust this information is helpful in answering at least some of the questions you have addressed in your letter. Enclosed please find two reprints of an 1888 Catalogue which gives some historical information about Steinway & Sons during this era. I trust this will be enjoyable to you and your client.

Best regards,

STEINWAY & SONS

Michael Mohr

Michael Mohr  
Director, Service Administration

/gj

Encls.

資料1 スタインウェイ & サンズ社からの回答

三センチメートル。ただし、奥行きは約二五センチメートル。鍵盤は白鍵五〇、黒鍵三五の八五鍵。音域は、2A♭a、七オクターブである。このピアノの特徴は、素速い連打を可能にする構造のアクションメカニクを持つことにある。そして、現在のスタインウェイ&サンズ社のピアノに限らず、ほとんど全ての有名ピアノメーカーがこのアクションの改良型を採用している。これは、まさに現在のピアノアクションの源流ともいえる。当時の価格は、一一七五ドルという。

のように、昭和七(一九三二年)二月、水海道尋常高等小学校が購入するまでの足取りについても、不明である。ただし、昭和四九(一九七四年)、水海道小ピアノの存在が注目された時の新聞に、このピアノを同校に納入した東京都文京区の三浦楽器店社長三浦浩の談話として、

確か外国の外交官が使っていて、日本を去るときに手放したものを  
お売りしたと思うんですが  
と記載されている。また、三浦の談話が、

確かに私が売ったピアノです。蒲田(東京)のピアノ屋さんで修理中  
の中古品を組み立て直してから売ったんです。あのころ、小学校で  
スタインウェイを買うなんて、本当に珍しかったからよく覚えてい  
ますよ。

とも記述されている。これらの手がかりを元に、所有者が外交官とすれば、明治四年から昭和七年の何れの時期にどの国の外交官が使用していたのか、日本に輸入当時の水海道小ピアノの使用(所有者・使用場所・使用機会、蒲田の楽器店等)についても、史料調査を行ってきたが不明である。水海道小ピアノは、明治期には当時の文明開化を彩ったピアノの一台としても存在していたものと思われるが、明治四年から昭和七年に至るまでの実態の解明は、今後の課題である。

## 二 洋楽とピアノの導入

水海道小ピアノは、明治四年にアメリカから日本に送られた。  
日本には、西洋音楽(以下、洋楽という)やピアノが、どのように導入されたのか概観してみよう。

日本における洋楽は、天文一八(一五四九年)のキリスト教の伝来に始

まる西洋文化の渡来の時期に最初に導入された<sup>(23)</sup>。中でも、キリスト教の布教者たちは、音楽を布教には不可欠なものとして広めて行った。そして、当時の日本人も一部ではあったが洋楽を享受していた。しかし、慶長一四(一六二四)年に始まるキリスト教弾圧、寛永一六(一六三九)年の鎖国政策により洋楽の浸透は進まず、長崎において僅かにオランダ經由の洋楽が伝えられていた。

ピアノは、一七〇九(宝永六)年イタリアのクリストフォリによって発明されたというのが一般の定説であるが、日本には、いつ入って来たのだろうか。

安永七年(一七七八)、三浦梅園が長崎へ旅行をし、同年その見聞録を『帰山録』にまとめた。梅園は阿蘭陀通辞の吉雄耕牛を訪ね、その時の様子を、

吉雄亭奇貨多し只此時長崎熱鬧其奇貨を遍く見其説を詳に盡す事能はず今に是を憶む亭上阿蘭陀琴、望遠鏡、顕微鏡、天球、地球、ヨクタント、タルモメートル、其外奇物種々を見る

と記している。この阿蘭陀琴がピアノの可能性がある。翌年、梅園は、「謝吉雄耕牛恵西洋管窺鏡畫」の詩を作っている。この詩の解説には、西洋琴の文字がある。

寛政一二(一八〇〇)年、長崎出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ<sup>(26)</sup>によってピアノが輸入され、これが本邦輸入ピアノ第一号ともいわれる。

長崎<sup>(27)</sup>では、ピアノは紅毛楽器の中で、「ピヤノ piano」、「ホルトピヤノ fortepiano」という言葉で、その存在が知られていた。

日本に現存する最古のピアノは、山口県萩市の熊谷美術館に保存されているシーボルトのピアノ<sup>(28)</sup>である。文政六(一八三三)年、オランダの東

弾いていたという。

明治二(一八六九)年、日本とオーストリアの国交が開かれた。そして、皇室に一台のベーゼンドルファー・ピアノ<sup>(37)</sup>が献上された。日本に入ってきたピアノの第一号であろうという。明治二年には、ドイツ製のスクエアピアノ<sup>(38)</sup>が輸入された。日本に本格的にピアノが入ってきた最初とみられている。

明治三年九月二八日、横浜の本町通り一三五番地にあった中国劇場で、「ボックスとボックス」が上演され、イギリス第一〇連隊将校ウォートン<sup>(39)</sup>がピアノ伴奏をした。明治三年二月六日には、本町通りにゲーテ座が開場し、ロンドンのコラード・アンド・コラード社のピアノ<sup>(40)</sup>が備えられ、ピアノの入った室内楽が楽しまれた。

明治三年七月、学校で最も早くピアノを備えたのは、横浜のフェリス和英女学校<sup>(41)</sup>であろうといわれる。

明治四年、スタインウェイ&サンズ社製造のグランドピアノ<sup>(42)</sup>(前述の水海道小ピアノ)がアメリカのニューヨーク市から横浜に向けて送られたという。

明治四年の頃、英国人アレキサンダー・クラーク<sup>(43)</sup>なる人が、バイオリン其他の楽器類を英国より取寄せ売品とした。また、明治二、三年頃、文部省に音楽取調掛が置かれた時、ピアノ、オルガン、バイオリン等の洋楽器を供給したのは、このクラークであったという。

明治五年、東京にあったイギリス公使館の書記官であったアーネスト・サトウ<sup>(44)</sup>(Ernest Mason Satow)は、両親から贈られた Collard 社製のピアノを自宅の居間に置いた。アストン夫人やチェンバレンなどと連弾を楽しんだという。

明治六年、W.E. Aytton<sup>(44)</sup>は、工部大学校(現、東京大学工学部)の電信・

インド陸軍病院付外科医であったシーボルトは、日本研究を命じられて長崎に来了。文政九年、シーボルトは、江戸への参府にもピアノを持参し、薩摩藩の島津重豪や中津藩の奥平昌高・奥平昌暢という蘭癖大名たちに披露した<sup>(29)</sup>。そして、文政十一年、シーボルトは舶来の珍品の愛好家であった知人の熊谷五右衛門にピアノを贈った<sup>(30)</sup>。ピアノはロンドンのロルフ社製のスクエアピアノで六八鍵である。

天保年間(一八三〇〜一八四四)の間にはオランダ人から軍楽を習う藩があらわれたり、嘉永六(一八五三)年ペリーの艦隊が神奈川の幕府の役人の前で演奏したりする等、江戸後期には洋楽が徐々に響き始まってきた。

嘉永六(一八五三)年、ロシアのプチャーチンが四隻の軍艦を率いて、条約締結のために来日した。旗艦パルラダ号に乗船した式部長の中村は、艦長室のピアノ<sup>(31)</sup>に感動したという。

安政五(一八五八)年、日本がアメリカ他四ヶ国と修好通商条約を締結してから、外国人が横浜、函館等にやって来た。これらの外国人の中には、洋楽を演奏して楽しんだり、中にはピアノを持参したりした人々もいた<sup>(32)</sup>。安政六年、神奈川(現、横浜市)の成仏寺では、宣教師ブラウンの娘(長女ジュリア、次女ハティ)の弾くピアノ<sup>(33)</sup>の音が通行人の足を止めさせたという。文久元(一八六二)年にキリスト教伝導のために来日していたヘボンも、ピアノを持っていた。ヘボンを訪問した商人の日記には、

ヘボン子の部やへ皆々入。五才十才迄の子供四人出、琴をしらべ唄をうとふ(略)

と記されている。

慶応元(一八六五)年、横浜の居留地で開かれた「休暇旅行」という題のジオラマ公演でピアノ<sup>(35)</sup>が使用された。慶応二年、フランス軍事顧問団の一員として来日したデシヤルム大尉は、グランドピアノ<sup>(36)</sup>を持込み

理学の教師として招かれ、アメリカの Chickering 社製のスクエアピアノを演奏して遠い家郷を偲んだという。このピアノは、小野健一によれば、アメリカ渡来第一号と考えられるという。

明治五年、学制が頒布されたが、唱歌は当分これを欠くとされた。当時の日本には、音楽の指導者も楽器も揃ってはいなかった。そこで、明治二(一八七九)年、文部省は音楽取調掛を設置し、本格的に指導者の育成を図ろうとした。そこで、明治一三年、音楽取調掛で使用するピアノ<sup>(45)</sup>(アメリカ・チックリング社製スクエア型ピアノ)一〇台を輸入した。

幕末から明治初期の横浜でのピアノ調律師については、以下の様な人物がみられる。元治元(一八六五)年八月頃の Marquis Chisholm<sup>(46)</sup>、明治元年の Schwartz (Watchmaker, tuner)<sup>(47)</sup>、明治四年の Mr. Crane<sup>(48)</sup>、明治五年の A. Hahn<sup>(49)</sup>である。これらの調律師のうちの何人かは、水海道小ピアノに関係していたのだろうか。

幕末から明治初期にかけてのピアノの導入・普及は、来日外国人の持参、商品としての輸入などである。そして、それらのピアノは、使用場所や目的によって、当時の文明開化を彩ったり、一部の学校における教育、キリスト教の布教に活用されたりしていたことと思われる。

### 三 水海道小学校とピアノ

#### (一) ピアノの購入

昭和七(一九三二)年、水海道尋常高等小学校が、一八六五年アメリカ製グランドピアノ<sup>(50)</sup>(前述の水海道小ピアノ)を購入した。

水海道尋常高等小学校は、明治八(一八七五)年の創立で、明治一四

吉氏、梅沢貞吉氏、青木常吉氏で、校医は片見松郎氏、中村洪一氏で、現在と同じ顔触れであった。第一回の協議会では、趣意書を作つて学務委員と校医が、町内各方面の諒解を求めることになり、毎日の様に幾日かを費し、寒風にさらされ乍ら熱心に勧説の結果、目ざした有志は、いづれも賛意を表せられたので、いよく會員を募集することになり、一方町務委員の協力を求めて、町内別荘と戸毎に就き加入を求めると、是非快諾されて、応分の口数を申込まれた。即ち三月二十日遂に申込まれた會員数三百七十二人、申込口数二千二百五十四で、毎月百十二円七十銭づゝの会費が集まることになった。そこで、四月二十五日に設立総会を開き、会長松沢先生以下の役員及評議員等の機関が備はり、昭和七年度の予算を議決し、四月から会務を執行することになった。

市町村立小学校に要する費用は、教員俸給費の約六割を国庫が支弁してくれる以外は、全部を市町村が負担することになった。市町村には教育費の外に、神社費、会議費、役場費、土木費、警備費、衛生費、各種団体の補助費、隔離病舎費、財産積戻費及営造物営繕費等年々巨額の費用を要するので、教育費のみを潤沢にするといふ訳には行かぬ。殊に大きな市町は小さな町村よりも、教育費以外の費用を多く支出せねばならない現況である。従つて教育上の施設が学校の大きさに伴わないうらみがある。しかも次代の国民となるべき児童の教育上、いつれの父兄も教師も切望することは、この子が成長の後には自分よりも強健であつて智徳のすぐれた有為の人物になり、心身共に幸福な生活が営める様になりたい。といふことである。この念願を達成すべくいづれの家庭でも学校でも努力してゐるのであるが、その程度は村落よりも都会の方が強度であると言ひ得



写真2 旧水海道小学校本館

(二八八)年には洋風の校舎(写真2)が建築された。大正一〇(一九二一年)には水海道尋常高等小学校の校舎移転に伴い、この校舎も移転された。昭和三三(一九五八)年には、この校舎の玄関部分が茨城県の文化財に指定された。さらに、昭和四六年には、水海道市立水海道小学校の校舎移

転に伴い、この校舎は茨城県に寄贈され、茨城県立水戸農業高等学校跡地(現、茨城県立歴史館敷地)に移築された。そして、昭和四八年に、創建当時の姿に復元された。

昭和四九年九月三日、茨城県歴史館が開館し、この校舎は旧水海道小学校本館として建物を公開した。

水海道市は茨城県の西部にあり、近世から明治期には、鬼怒川の水運で栄えた所でもあった。水運により水海道は江戸・東京と結ばれ、物資が輸送されたり、文化が伝えられたりした。また、文化人が水海道に移住したり、来訪したりしたという。また、明治一〇(一八七五)年には、水海道警察署の建物が、洋風三階建てで完成し、新しい文化が流入していた。このように、近世から近代にかけて、町の人々の文化や教育にける風土が培われてきた。

水海道尋常高等小学校でのピアノ購入の背景を、当時の校長であった柴沼三郎の証言で追ってみよう。

私は県南の吾が教育町に、小学校後援会のないことを頗る物足りないと思ひ、就任以来機会ある毎に、他の市町村に於ける後援会の状況を調査して居たが、会の性質上、校長の職に在る私から発議すべきでないから、只管時機の到来を祈つてゐたのであった。すると、昭和六年の紀元節祝賀式に、小学校へ参列された学務委員及校医の諸君が、講堂の建築は町当局及議員の諸君の手によつていよいよ出来ることになったが―其の実さうなるまでには、並大抵でない尽力をされたのであった―後援会は吾々の手で成立せなくてはならない。それにはこの十六日に、小学校で学務委員と校医の協議会を開いて、設立に関する諸般の打合せをしよう、といふことになった。

当時の学務委員は、中山藤吉氏、富村登氏、高原佐一郎氏、鈴木春

る。而して教育の作用に甚大なる影響を与ふるものは、遺伝と環境とであるが、遺伝は暫く措き環境は人為的に余程まで改善が出来るから教育の任にあるものは常に之が改善を図らねばならぬ。小学校児童の環境として最も重要なものは小学校の教師と校風と設備とである。教師と校風とは、教師の修養と指導と努力によつて改善し得るも、設備については市町村の理事者若くは父兄の力にまたねばならぬ。然るに市町村の財政が多端で、小学校費にのみ十分なるを許されないとすれば、こゝに何等の方法で不足を補わねばならない。之の内外に亘つて重なる市、町に小学校後援会の設けがあるのであると思ふ。当町小学校後援会も如上の旨趣によつて、学務委員、校医の各位が、涙ぐましい尽力によつて設立され、爾来小学校の為にピアノ、講堂、奉掲所綴帳、同窓かけ、人体模型、理科実験器等の購入費を補給し、町費だけで支弁し得ざる備品を設備して、同校教育上直接間接に寄与せられた功績は甚大なるものであると信ずる。之れ役員各位の穩健にして熱心なる尽力と會員諸君が毎月会費の完納に努められた結果であつて、誠に感謝の至りである。希はくば、此上とも本会が将来永く存続して、小学校の事業を援助し以て吾が水海道小学校に学ぶ千数百の幸福を増進し、当町教育の伸展に資せられんことを願ひする。

水海道尋常高等小学校の設備充実にかける学校及び後援会の熱意が伝わってくる。では、水海道小ピアノの購入に至るまでの後援会の活動状況を、水海道小学校後援会が作成した『会誌』<sup>(59)</sup>からたどってみよう。

昭和七年二月一二日、水海道小学校学務委員会が開かれ、鈴木春吉学務委員が小学校後援会の設立趣旨を述べ、満場賛成を得た。そして、至急会則を草案し、二月一六日に再会協議することを決した。当日の出席

者は、水海道町助役犬塚駒吉、小学校長柴沼三郎、学務委員中山藤吉、同高原佐一郎、同鈴木春吉、同五木田卯兵衛、同松沢得三、学校医片見松郎、同中村洪一の九名であった。

二月一六日、学務委員会において小学校草案の会則を協議、決定した。

二月二二日、小学校で発起人会を開き、趣意書及び会則を修正した。

二月二二日、小学校で発起人会を開き、実行方法について協議した。

また、二二、二三日の両日、鈴木・中山・高原・松沢・五木田の各学務委員と校医の中村が町内有志及び町会議員を訪問し、賛成を求めた(二三日は校医の片見が加わり、五木田は欠席した)。

三月二日、発起人会を小学校で開催した。

三月七日、柴沼学校長が新旧学務委員の来校を求め、小学校の現状を述べ、将来の援助方を依頼した。出席者は、武藤町長、学務委員中山、同高原、同松沢、同鈴木、同富村、校医片見、同中村、学校長柴沼、訓導沼尻の一〇名であった。学務委員のうち新任者は、富村登であった。

三月九日、有志及び町会議員の賛成者募集終了につき、募集すべき見込委員の調査をした。

三月一〇日、趣意書及び会則五〇〇枚の印刷を印刷所に発注した。

三月二二日、学務委員会町務委員会を役場にて開催した。募集方法として、募集期間は三月末日限り、納税(戸数割)一〇〇円以上のところは発起人全部と町内の学務委員にて募集する事等を協議した。

三月二四日、募集見込の有志に対し趣意書及び会則を送付して入会募集の予備とした。

四月一四日、発起人会を開催した。会費募集の方法で、会費は四月分より集め、集金は有給(月手当三円)の人が行う事、創立総会を四月二五日に小学校で開催する事を決議した。

副会長 鈴木春吉

理事 学務委員(八名)

鈴木春吉、梅沢貞吉、青木常吉、高原佐一郎、富

村登、中山藤吉、松沢得三、柴沼三郎

小学校医(二名)

中村洪一、片見松郎

選挙(一〇名、総会の選挙で選出)

秋山藤左衛門、北川龜太郎、坂本茂兵衛、鈴木喜太郎、中山重次郎、羽田包次、増田卯五、山中孝作、武藤久兵衛、犬塚駒吉

幹事 高原謙蔵、稲見富、沼尻茂、井上小四郎

一〇月二五日、松沢会長、鈴木副会長、柴沼常任理事協議の上、水海道町長に次の寄附申込書を提出した。

一金 五百円也 水海道小学校用ピアノ購入見込

価格壹千貳百円の内へ寄附

一 講堂御真影奉掲所用 外幕綴子製式張

一 全 用 横幕綴子製巻帳

一 全 用 内幕金紗縮緬製巻帳

一 全 用 金具一式

以上価格貳千貳百円也

水海道小学校備品として寄附

一月九日、午後二時よりピアノ購入に関して協議会を開催した。スタンウィー(当時の呼称)の中古品を可として、その下検分のため鈴木副会長、小学校唱歌主任片野次郎平(明治三六年生まれ、昭和六年二月一五日から同校勤務の上京を決定した)。

四月二三日、発起人会を開き、以下の事項を議決した。

一 予算概要

歳入 一三六八円 会費 二二八〇口分

歳出 一三六八円

内訳

奉掲所用綴帳 二〇〇円 ピアノ 五〇〇円

人体模型 一〇〇円 運動器具 一五〇円

児童文庫 八〇円 表彰費 五〇円

運動会補助 三〇円 集金費 三六円

幹事手当 二〇円 筆墨代 二四円

会議費 二〇円 積立金 五〇円

予備費 一〇八円

二 会則の承認及び修正、役員について

四月二五日、総会を小学校裁縫室で開催した。

総会の順序は下記の通りであった。

一 座長選挙

二 本会設立に関する経過報告

三 会則議定

四 役員選挙

五 会長就任

六 昭和七年度予算報告

七 小学校長挨拶

八 閉会

決定した役員

会長 松沢得三

出席者 松沢会長、鈴木副会長、犬塚・柴沼両常任理事、沼尻幹事、

片野訓導

一月二九日、鈴木副会長、片野次郎平訓導がピアノ検分のため、三浦楽器店(東京市本郷区。現、東京都文京区)に行った。

一月二二日、三浦楽器店主三浦浩が来校した。松沢会長、鈴木副会長、犬塚助役、柴沼学校長と会同の上協議し、スタンウィーの中古品を購入することを決定した。

一月二四日、午後一時より理事会を開き、ピアノ購入につき協議をした。スタンウィーを購入することを決定し、町長に具申した。

出席者 松沢会長、鈴木副会長、松沢・青木・中山・中村・北川・

犬塚各理事、沼尻幹事

一月一日、午後二時、ピアノが到着した。町会議員、松沢会長、鈴木副会長が検分した。また、音楽家藤田氏及び水海道尋常高等小学校職員が演奏した。

昭和八年三月一四日、評議員の会合で、ピアノの存置について講堂は湿気が多いため、唱歌室に変更することの諒解を得た。

ピアノの購入について、昭和七年十一月七日の町議会<sup>(53)</sup>で議決がされた。同日の議案のうち、第六号議案「寄附受領ニ関スル件」が提出、議決された。

一金五百円也 水海道町小学校後援会長松沢得三氏ヨリ

但シ 当町小学校備品トシテ「ピアノ」購入ノタメ指定ノモノ

同じく第七号議案「昭和七年度水海道町歳入歳出追加更正予算」の歳出臨時の部で小学校設備費のうちピアノ購入費一二〇〇円が議決された。

水海道小ピアノは、小学校の後援会費五〇〇円と町予算七〇〇円の合計一二〇〇円で購入された。

(二) ピアノと音楽活動

ピアノの購入に当たっては、水海道尋常高等小学校校訓導の片野次郎平が三浦楽器店と知合であったため、選定などの役を担当したという。また、片野は自らもピアノを所有し、水海道尋常高等小学校での購入以前には学校にピアノを運搬し、授業に使用していたという。水海道尋常高等小学校では、情操教育の一部面として、また学校と家庭との連絡の方法として、昭和六年以来唱歌会を実施して来たという。その唱歌会の歩みをたどってみよう。

第一回

一 昭和六年七月二十八日

二 会場は、講堂なく旧校舎の三教室を打抜き児童全部を教室廊下に坐らせたが、場所が狭くて一寸の隙もない状態であった。

ピアノ いまだ購入していない為、他より借用して使用する。

曲目 五五曲 プログラムの通り

斉唱、合唱、独唱、遊戯

三 参観者状況 総数二百四十四人

第一回の会の為未だ唱歌会には理解を持たぬ父兄の多かったことと会場の不完備から少きを予想してゐたにもかゝらず二百名以上の数を見たことは意外であった。

四 その他 極めて幼稚な当校の唱歌にて第一回としては成功と思う。設備の不完備なところとしては出演方法、進行振り何れも良好と思う。基本練習は今後充分努力を要する点と思う。

第二回 ピアノ披露児童音楽会(資料2)

一 昭和七年二月二十六日

二 会場 本年五月講堂新築落成会場稍々完備す

一 二月初旬ピアノ購入(千二百円)

三 東京市西巣鴨第五尋常小学校の石塚響一と同校の児童七名が賛助出演

四 参観者状況 三百五十七名

五 その他

○会場は極めて静かにて音楽会として誠に結構であった。これ以上の父兄を入れることは稍々困難を感じる。

○演奏に関して

種目の内容が全般に亘っていたこと、各学年共に唱歌担任者伴奏したこと 結構な点

成績昨年比して進歩の度が表われてゐた。

尚一段の努力を要する点

曲の解釈の不十分な点あり

歌い方の指導に考慮を要する。

東京の出演児童について

すべて本校の模範として相当の效果を持つ。一般父兄に対しても真の音楽鑑賞について多大の参考になったことと思ふ。

第三回 唱歌会

一 昭和九年二月二十日

毎年第一学期中に実施する予定のところ本年度は教育調査会の為第三学期に延期す

二 会場、方法等前年通り

第四回 唱歌会

一 昭和九年六月二十九日

プログラム

第一部

出演 水海道尋常高等小学校児童

|               |                     |
|---------------|---------------------|
| 開会ノ辭          | 藤井昌子                |
| 1. 斉唱 スキ      | 日本教育音楽協会編 五年 神林芳子 名 |
| 2. 斉唱 いろはがらた  | 日本教育音楽協会編 二年 入江十男 名 |
| 3. 斉唱 野郎の月    | 大和田建樹作歌 二年 平外 名     |
| 4. 二部合唱 その野   | 天城小児唱歌 高女生 名        |
| 5. 斉唱 イズミノナヒキ | 日本教育音楽協会編 一年 富村秀夫 名 |
| 6. 獨唱 とんび     | 高田しげる作歌 永野八重子 名     |
| 7. 輪唱 桃       | 長北村幸晴編 六年 芳野正 名     |
| 8. 齊唱 温泉町から   | 高田しげる作歌 三年 枝川あや子 名  |
| 9. 舞踏 ひなげし    | 五年 鈴木千代子 名          |
| 10. 齊唱 赤いお団さん | 丸山勝一即作曲 四年 片野かつ名    |
| 11. 三部合唱 雪の歌  | 高野風之作歌 金の鈴合唱団       |
| 校歌            | 全校児童                |

(休憩十分)

第二部

出演 東京市西巣鴨第五尋常小学校児童  
ピアノ伴奏 石塚響一

|            |                |
|------------|----------------|
| 挨拶         | 校長 金子千子        |
| 1. 唱歌遊戯    | 新橋 敏子          |
| 1. 日 本     | 清水かつら作歌 野口温子   |
| 2. たこあひの歌  | 高田しげる作歌 野口温子   |
| 2. ピアノ獨奏   | No. 88 中村喜世子   |
| 練習曲 バイエル   | No. 98         |
| 3. 獨唱      | 中村喜世子          |
| 1. 雪 降 の 音 | 高田しげる作歌        |
| 2. 新兵さんの重足 | 本居長世作歌         |
| 4. 獨唱      | 林路子            |
| 1. オクティカンゴ | 島田芳文作歌 貞正作歌    |
| 2. ひまわり人形  | 松浦隆雄作歌 室等孝月作歌  |
| 5. ピアノ獨奏   | 鈴木照子           |
| 練習曲 バイエル   | No. 94 No. 96  |
| 6. 獨唱      | 中村喜世子          |
| 1. 雨 だ れ   | 高田しげる作歌 小松福福作歌 |
| 2. か ら こ ん | 高田しげる作歌 高田 貞作歌 |
| 7. 唱歌遊戯    | 新橋 敏子          |
| 1. 千 代 紙   | 西村龍香作歌 室等孝月作歌  |
| 2. カチカチ山で  | 寺ヒコシ作歌 石塚響一作曲  |
| 8. 齊唱      | 高田しげる作歌 林路子    |
| 1. 羽 衣     | 高田しげる作歌 室等孝月作歌 |
| 2. 汽車ゴッポ   | 本居長世作歌         |
| 9. 閉会ノ辭    | 花              |

資料2 「ピアノ披露記念児童音楽会」プログラム(昭和7年12月26日)

二 会場、方法前年通り

三 反省

1 会場について。当日暑さ厳しき処で窓全部開放にした為児童の声が後までとほらなかった。

2 出演児童の配列

第二列以後の児童は腰掛を用ひて段を作り児童の顔がよく見えるやうとした。

3 児童の服装が華美になったやうに思われた。然し夏物は型や色彩の配合等が美しいので華美のやうに感ぜられるのである。

児童音楽舞踊の夕

一 昭和九年八月十七日夜

二 後援会より費用支出して夏休中に開くことにした。内容はプログラム通り 西巣鴨第五尋常小学校児童九名の賛成出演があった。

三 入場者は一般から期待されてゐた為、一般の父兄の来会者が非常に多く全く満員の状態であった。

第五回 児童唱歌会

一 昭和十年六月二十二日

二 実施方法昨年通り

三 反省その他

1 年を追ふて進歩の度を認む。

2 参観者は四百二十名 本年度は特に「父兄招待券」を発行したが入場その他会場内に於ける訓練も相当によくなつて来たやうに思ふ。

3 全児童の出演出来ないことは遺憾なり

水海道小学校の『沿革誌』には、第六回唱歌会は、昭和十一年一月

教育後援会の『会報』<sup>57</sup>に紹介されている。

◇ピアノの先生

学校にピアノのあることは本校の誇りであり、が個人でピアノを所有して朝夕その道にいそしんでゐます先生に片野、河田の両先生があります。小学校の三階が縣下にないやうに、こんなにピアノ



写真3 金の鈴合唱団（昭和9年頃）

二日に開催され、来観父兄は三〇〇名とある。

水海道尋常高等小学校でのピアノ購入に合せた動きとして、水海道尋常高等小学校内に金の鈴合唱団<sup>58</sup>（写真3）が、昭和七年十二月に結成された。その趣旨は、「長い間の宿望であったピアノが購入せられたのを機会に当校の音楽教育の統制を図る目標で各学級より若干名ずつ集め課外指導により各学級のリーダーを養成し、これ等によって学級のレベルの向上を図る」ことであつた。児童入団の基準は、

- 一 該学級の唱歌担任者の適当と認むる者
- 二 家庭の許可を受けたる者
- 三 本人が充分研究の意思のある者

の三項に該当する者で、団員は昭和一〇年頃には五五名であつたという。練習は毎週土曜日の放課後約一時間半実施したという。教材は斉唱、独唱、合唱、舞踊のうち、特に合唱の指導に主力を注ぎ、力量は大体四部合唱の出来る程度に進んでいたという。金の鈴合唱団を指導していた片野は音楽教育にける考<sup>59</sup>え方を、次のように記している。

父兄各位の御熱誠なる御後援により、かねての宿望でありましたピアノが購入せられ、当校音楽教育の上に一大光明を与へられ、深く感謝をいたす次第であります。こゝに当校の音楽教授を担任してゐるに当りまして所感の一端を申上げて御礼の意を表したいと存じて居ります。どこまでも音楽教育の第一義目的で。

たゞ音楽教育に限らず、その成績技術の進歩巧拙にのみ拘泥することとは、大きな錯覚であり失敗であると存じます。しかし音楽はどこまでも時間的表現芸術である以上、その技術を絶対に要求するところでもありますから不断の練習と研究をつづけなければならぬところ

に難関もありますが、一面に又如何なる困難も苦慮とせず、希望と

に恵まれた学校も勿論縣下に二つとありません。かくて音楽教育の充実に。

金の鈴合唱団の音楽活動が盛んになっていった時期に、その活動が『東京朝日新聞』<sup>60</sup>に紹介された。

校舎の春高く、金の鈴合唱団

水海道児童は朗かに唱ふ

可憐なソプラノが校舎の窓から街へ流れて居る……水海道小学校の金の鈴合唱団だ、四年以上の各クラスから選抜した声の天才児ばかり、唱歌担任の片野訓導の指揮と河田訓導伴奏で四部合唱も鮮やかに舞踊も本格的、教育的な会合にはひっぱりだこの出演攻めに朗らかに唱つて居るこの合唱団はクラスの成績を向上させるリーダー養成が目的で一昨年出来たものだが本年度卒業生の中には将来音楽学校へ入学させたいと父兄が希望して居る者が十名以上もあるのです。校でも新学期から土曜日毎に本格的に指導する事となつた、やがて恩師の送別会に母校の講堂で咽喉をふるはせる時も来ようといふもの

金の鈴合唱団は、校内の音楽活動だけでなく、昭和九年三月五日には茨城県聯合女子青年団と結城郡聯合女子青年団の主催で行われた結城郡聯合女子青年団水海道地方部会総会（会員約三五〇名出席、会場は水海道尋常高等小学校講堂）にも参加している。総会の「清興プログラム」<sup>59</sup>には、金の鈴合唱団では斉唱「我国兵士」と「酸模の咲く頃」の二曲、四部合唱「雲雀の歌」があり、茨城県立水海道高等女学校（現、茨城県立水海道第二高等学校）の生徒のダンスと劇の出演もあった。

昭和一〇年二月二十四日、前年に続き女子青年団総会（会場は水海道尋常高等小学校講堂）に参加した。総会の「清興プログラム」<sup>60</sup>には、金の鈴合

唱団では斉唱「躍進日本」、「三保の松原」、「秋の聲」の三曲、二部合唱「朝の歌」、四部合唱「雲雀の歌」があり、琵琶の安藤旭錦(筑前流)の出演もあった。

昭和十一年二月一日、茨城県立水海道高等女学校の第一三回学生会にも、金の鈴合唱団員など水海道尋常高等小学校児童約一〇〇名が参加した。金の鈴合唱団では、斉唱は「ポツクリカッコ」と「風あげの歌」の二曲、二部合唱「凱旋」、四部合唱「雲雀の歌」の発表をし、併せて水海道尋常高等小学校児童の舞踊も行われた。児童の発表は大変好評で、一層この会に光彩を加えたという。

水海道尋常高等小学校では、音楽教育の振興のために唱歌講習会などが開催されていた。『沿革誌』<sup>62)</sup>から、活動の様子を探ってみよう。

昭和九年一月二四、二五日、唱歌研究会主催の日土講習会が講堂で開催され、講師は東京高等師範学校附属小学校訓導小林つや江であった。

昭和十一年一月二〇日、唱歌遊戯研究会主催の遊戯講習会が講堂で開催され、講師は谷島伸で、参加の会員は約三〇名であった。

昭和十一年七月一日、唱歌講習会が開催された。

昭和十一年八月六日から八日まで、唱歌研究会主催の唱歌講習会が、講師に田村虎蔵の他一名を招いて開催された。一五〇名が来会した。

昭和十一年二月二五日、音楽研究会主催児童唱歌講習会が開催された。

昭和十一年八月一日から二日まで、唱歌研究会主催の講習会が開催された。講師は、田村虎蔵、石塚響一の二氏であった。

昭和十二年一月一七日、唱歌研究部主催の遊戯講習会が開催された。講師は谷島伸で、会員四一名が参加した。

昭和十二年度から昭和十八年度については、『沿革誌』には音楽に関

した。昭和十三年一〇月五日、茨城県NHK全国唱歌コンクールで三位となった。

昭和十四年九月六日、在京の水海道小学校出身有志、PTA有志、市費にてランドピアノ二台を購入し、ピアノ披露会が開催された。

昭和十五年、水海道小学校校長猪瀬嘉造は、水海道小学校の音楽指導の状況と成果について述べている。猪瀬は、ピアノについては触れていないが、水海道小ピアノの存在が、同校の音楽教育の基盤となっていたことと思われる。また、水海道小学校では、音楽教育研究家石塚響一による音楽の指導が戦前から昭和四〇年頃まで継続され、石塚の指導も水海道小学校の音楽教育及び指導者の質的向上に貢献したという。

### (三) 茨城県歴史館への寄贈

水海道小ピアノは昭和五〇年に茨城県歴史館に寄贈となったが、その経緯を水海道小学校の「ピアノ関係綴」<sup>66)</sup>からまとめてみよう。

水海道市立水海道小学校では、昭和四六年度に新校舎三棟が完成し、昭和四九年三月には体育館竣工の予定であった。体育館竣工により館内にピアノが必要となるので、昭和四七年度より旧講堂で使用していたピアノ(前記水海道小ピアノ)の修理について、静岡県浜松市の日本楽器に相談したが、外国製のピアノのため完全な修理は不可能ということであった。

そこで、水海道小学校ではスタインウェイ&サンズ社の日本総代理店である東京の松尾楽器商會に水海道小ピアノの修理のための調査を依頼した。昭和四九年八月、松尾楽器商會の調査がされ、水海道小ピアノの製造番号から皇居にあるスタインウェイ&サンズ社のピアノ(明治二八年ドイツ皇帝からの寄贈、製造番号六二一〇五八)よりも古いことが判明した。

する記述が見られない。

昭和二十一年二月一日には音楽会が実施されているが、水海道小学校の昭和二〇、三〇年代の音楽活動を追ってみよう。

昭和二十二年七月四日、水海道小学校の児童がNHKラジオの音楽番組に出演した。

昭和二十二年八月二日から三日間、PTA主催により、当時の童謡の人氣歌手であった川田正子・孝子の姉妹、海沼実、小夜福子、七尾令子、坂野ひろしその他が来会した音楽・演芸の会が開催された。

昭和二十五年八月一日、「納涼音楽の夕べ」(石塚響一指導)、「納涼舞踊の夕べ」(八住正指導)が開催された。

昭和二十五年一〇月二九日、茨城県ラジオ唱歌コンクールで一位となった。

昭和二十六年一〇月一四日、茨城県NHKラジオ唱歌コンクールで三位となった。

昭和二十七年一〇月二二日、茨城県NHKラジオ唱歌コンクールで二位となった。

昭和二十八年七月一日、新しく校歌を作詞西条八十、作曲平井康三郎により制定し、発表会が開催された。

昭和二十八年一〇月一七日、NHKラジオ唱歌コンクールで二位となった。

昭和三十一年一〇月二二日、毎日新聞社主催全日本合唱コンクール茨城大会で二位となった。

昭和三十一年九月二日、全日本器楽合奏コンクール茨城大会で優勝した。

昭和三十一年九月三〇日、茨城県NHKラジオ唱歌コンクールで二位となった。

このことは、マスコミにも注目されるようになった。

九月四日には、『読売新聞』の全国版にスタインウェイ&サンズ社のピアノでは日本最古という見出しで紹介されたり一〇月三日にはNHKテレビで水海道小ピアノの来歴などが放映されたりした。

その後、水海道小学校では水海道市長、水海道市教育委員会などと修復や保存について協議、検討を続けた。そして、昭和五〇年一月一日、水海道小ピアノは茨城県歴史館に寄贈と決定された。昭和五〇年一月二五日水海道小学校では「スタインウェイ・ピアノを送る会」(資料3)が開催され、児童一同でピアノとの別れを惜しんだ。

### スタインウェイ・ピアノを送る会

水海道小学校児童会

期日 昭和五十年一月二十五日(土)  
会場 水海道小学校 体育館

一 開会のことば

学校委員長

二 校歌斉唱

三 校長先生のお話

四 スタインウェイ・ピアノのことば

五 第一部 低学年

(1) 斉唱 ありがとうピアノさん 一年

(2) 斉唱 子じいのバンビ 二年

(3) ピアノ エリーゼのために 三年

(4) 斉唱 ふじ山 三年

五 お客さんのお話

六 スタインウェイ・ピアノのことば

七 第二部 高学年

(1) 輪唱 森のくまさん 四年

(2) 輪唱 月のさばく 四年

(3) ピアノ かっこうワルツ 五年

(4) 合唱 ジャバマーチ 五年

(5) 合唱 秋の子・泉のうた 六年

(6) 合唱 トルゴ行進曲 音楽クラブ

七 スタインウェイ・ピアノありがとう

八 閉会のことば

学校代表 つるおくぬ  
ピアノ独奏 六年 鈴木由美子  
学校副委員長

資料3 「スタインウェイ・ピアノを送る会」プログラム (昭和50年1月25日)

昭和五〇年一月三〇日、水海道小ピアノは、水海道市から茨城県歴史館に寄贈となった。

昭和五〇年二月八日、水海道小学校では、新規に購入したスタインウェイ&サンズ社のグラランドピアノの披露音楽会が開催され、児童の演奏や特別演奏(ピアノ荒谷淳子、バイオリン春日拓)が催された。

#### 四 茨城県立歴史館における展示と活用

昭和五一年五月一日、茨城県歴史館の敷地内にある旧水海道小学校本館では、一階の二教室を展示室として、明治期以後の教育資料の展示が開始された。<sup>(67)</sup>この展示は、第一展示室は水海道小学校教育資料、第二展示室は明治期の小学校教育資料の構成で、水海道小ピアノも、水海道小学校教育資料の一つとして展示資料に加えられた。

その後、平成二年には、水海道小ピアノの音の復活を目的とした修復が、スタインウェイ&サンズ社の総代理店である東京の松尾楽器商会で実施された。水海道小ピアノの修復前の状態、修復過程について『修復報告書』<sup>(68)</sup>からみよう。

##### 一 ボディ

###### ① 屋根(トップボード)

(状態) 大屋根の部分は、塗装の殆どが剥れ落ちて、素材下地の木目が浮き出していた。また縦方向に隙間がはつきり見えるほどの大きな割れが三ヶ所あり、そり止めの棒をはずすとばらばらの状態であった。前屋根のロックバー(鍵付きのそり止め棒)は、鍵部分がこわれていて変造した簡単な鍵付きのブロック板が継ぎ足してあった。

(修理) 大屋根の割れの修理は、補強、接着等様々な方法を考えた

たことを考えると製作当時使用された木材の材質の良さと、基本設計の優れた耐久性に驚かされた。

(修理) 支柱は、掃除をしたのみで当時のままである。

##### 二 脚・ペダル部

(状態) 脚とペダル部、ペダルアクションは、脚部材が杉材であること、取付方法が国産式(ボルト止め)であること、ペダルアクションのバランスが非常に悪いことなどから、過去の修理の過程で変造されているものと判断をした。ペダル取付部は、ペダル使用演奏に耐えられないため鉄製の吊り補強が付け足してあった。また、ペダルも国産品であった。

(修理) 脚部、ペダル部ともに杉材では弱くサイズも太くバランスが悪いので、現在のB型モデル(二一センチメートル)のオリジナル脚(ブナ材)とペダル部につけ替えた。しかし、現在のピアノ脚を取り付けるとピアノ全体の高さが違う(低い)ことと、脚そのものの取り付けを国産式のボルトではなく、現在のオリジナル金具に修正するため、ボディへの取付部分もオリジナルに戻す次の作業を行った。ボディと脚、ペダル部の間に現在のピアノ仕様と同等のブロック材を、歴史館のピアノに特別に合わせて作製して取り付け、スタインウェイ専用取付金具(メタルフィッティング)を埋め込み、脚、ペダルを取りつけた。ペダルも現在のオリジナルを使用した。ペダルボックス前面の金属プレートは、以前からついていたものを磨き直しサイズ合わせをして取り付けした。この部分には、現在のニューヨーク製も形状は異なるが金属プレートが取り付けられており、ハンブルグ製との違いが一目で判断できる箇所でもある。ペダルアクションもかなり継ぎ足しの変造であったため、すべて現在と同じものを代用し

が、修理後の維持を考えると、新規に作成、塗装をする方法が最善と判断し、鍵部分も現在のオリジナルの部品を代用した。木材は、軽く、強度を持ちつつ、そりが来ないように、シナ材のみの縦横一五枚合わせ合板を使用した。ボディに合せてから現物から図面をひき、形状は細部にわたってオリジナルと同じに、全て手作りにて約二〇日間をかけ作製した。

###### ② 親板(リム)

(状態) 親板(リム)は、腕木や口棒、鍵盤蓋にはかなりの欠損部分、傷があり、また、全体に化粧板の剥れ、浮きが見られた。特に、現代ピアノと異なる外観デザインの部分、前框と親板下部のボディを一周している二本のライン箇所がひどかった。また、ボディ全体下の裏側木部には、数えきれないほどの穴があった。以前の修理過程でうめ木をせず、次々とクギを打ちつけたり、ネジ等の穴あけを行って放置された跡と見られる。

(修理) 親板は、すべて欠損部分を同部材の木材で埋めて、処理をした。全体の塗装を一度剥がした後、表面の化粧板を一部貼り直し、サンドペーパー処理をして再塗装を行った。前框のカーブ部分の化粧板浮きの接着は、特に苦勞をした。現代のピアノは直角の普通の平面板のデザインが普通であるのに対し、平面でない独特のデザインであるため、化粧板の接着にカマやクランプが使用できず、カーブの部分と対称形であて木治具を作り、その木で押えつけて接着した。

###### ③ 支柱

(状態) 支柱は、過去の移動の際ついた多少の軽い凹み傷以外はほとんど異状がなく、一三〇年間、一〇トン以上の弦張力を支えてき

た。ペダルアクションは、鍵盤アクションと連係させるため、取付の位置だしにはかなり苦勞したが、現在のものとは寸度が違うので、すべて現物合わせとテストを繰り返し、注意深く、慎重に行った。今回の大修理の中で、以上の脚部取付を一番最初に取りかかり行った。脚部が取りつかないうちは、ピアノは低音部側のリムを下にして、九〇度にしたままの状態にしておかなければならず、他の作業に移行できないためである。それでもペダル部と合わせて一か月位かかり、ようやく次の作業へと移ることができた。

##### 三 鉄骨

(状態) このピアノの鉄骨は、現代ピアノの総鉄骨に対して半鉄骨と呼ばれるもので、弦が巻つけられているチューニングピン、ピン板の箇所以外の部分が鉄骨になっているものである。半鉄骨では、弦の張力が総鉄骨に比較して四〇%程少ない。スタインウェイ社は、当時、「鉄骨など重量を増やすとピアノの音は響かない」という通説とは逆に、半鉄骨から総鉄骨へと改良を試みていた。一八六七年(歴史館のピアノ製作の二年後、パリの国際万国博覧会では、総鉄骨交差弦のピアノを出品して、当時の世界のピアノメーカー達をその豊かに鳴り響く音で驚かした。そして、その後のヨーロッパのピアノが総鉄骨へと変遷していったようにピアノ製作技術に多大な影響を与えたのであった。当該ピアノの鉄骨は、錆等の発生はあったが、一番大事な強度、耐久性については異状が見られない状態であった。また、弦の割りを決定しているアグラフは、最低音から最高音までの総アグラフになっており、この部分についても異状はなかった。鉄骨をボディから取り外した時、鉄骨と響板との間に蓄積されていた長年の埃は、三、四センチメートルの厚みでびっしり敷き詰めら

れていた。現代ピアノの鉄骨には、表面上に各々デザイン違いはあるものの、穴や隙間があるのが一般的であるが、このピアノにはそのような空間がないため、埃の逃場がなく数十年の埃が蓄積されたままであったものと思われる。(注、アグラフ・ピアノの音は、その音域によって一音につき一弦で音を出すところ、二弦、三弦で出すところと分れており、各弦を等間隔で張弦し、鉄骨に割り振るための調整金具)

(修理) 鉄骨は外した後、錆び等を鉄ヤスリとサンドペーパーで処理をし、金粉塗装を施した。金粉は、現在スタインウェイで使用されている数種のものより、色合いの変化を考慮しレモン一色にて塗装した。アグラフは、穴の中を一つ一つ清浄液にて掃除をした。

#### 四 響板・響棒・駒・駒ピン

(状態) 響板(マツ材)は亀裂がひどく、大小あわせて二〇数本の割れが見られた。スタインウェイでは響板亀裂修理は少なく、最も多い時でも五、六本ということを考えたと一世紀以上に渡る響板への負担、また、保管状況による温、湿度変化の膨張、収縮の繰り返しで割れが増えていったものと思われる。割れの長さは、縦方向に五〇センチメートル〜一五〇センチメートル位の範囲にあった。響板の補強と音の伝達を兼ねている響棒(マツ材)は殆ど異状がなく接着が剥れているものが一、二本あるだけだった。駒(カエデ材)、駒ピンは異状が殆ど見られなかった。特に弦張力によってかなりの力のかかる駒ピンの緩み、駒の割れがないことに驚かされた。

(修理) 響棒の接着剥れは、当時のまま膠で接着しなおした。(膠は現在スタインウェイ社で使っているものを用いた。) 響板の亀裂はなるべくオリジナルの部分を残すため、髪の毛程の亀裂を響板の木目一枚(約一〜二mm幅)だけ広げて埋める作業を行った。部材はオリジナル

し、その弦サイズを使用した。コンピュータ計算のデータ資料として、上記スタインウェイの実測以外に、『ピアノ構成論』S・ウォールフェンデン著(郡司すみ訳)。全国ピアノ技術者協会発行。『アップライト及びグラランドピアノの構成』ユングハウス著(郡司すみ訳)。社団法人日本ピアノ調律師協会発行。全国ピアノ技術者協会部報に掲載された屋代千里氏の弦張力についての論文ほか、中谷孝男氏の著作などを参考にした。

#### 六 アクシオン・鍵盤

(状態) 当該ピアノの特長であるアクシオン(打弦機構)は、一八六四〜五年にスタインウェイ社で開発導入をしたアクシオンで、現在のスタインウェイアクシオンは言うに及ばず、他メーカーも含めて現代ピアノのアクシオンメカニクスの原形モデルになったと言える。一八二一年、フランスのエラールが発明したダブルエスケープメントアクションは、鋭敏な反復連打が可能なその優れた演奏機能性において、ピアノのアクシオン変革の歴史の中で、多分最大のものとして評価するに値するものであると思われる。当該ピアノは、そのエラール源流のメカニクの特長を最大限に生かしたヘルツによる二重スプリング、レベティションメカニクアクションを採用し、製品化したピアノである。エラールアクションの原理を様々に応用して、エラール以後アクションの変遷は続いたが、このスタインウェイの製品化したアクションが、現代ピアノのアクションの原形となったことは、疑えない。それは現在、このアクションモデルパーツ(サポート)が、現代の各ピアノ各メーカーのスタンダードモデルのアクションパーツとなっている事実が、何よりも物語っていると見える。ただ一つ、当該ピアノと現在のスタインウェイピアノアクション

ルと同じ松材を使用。亀裂をすべて埋めた後、サンドペーパー処理を施して響板ニス(スタインウェイ社製)流し込みにて塗布し、自然乾燥させた。駒、駒ピンは、清掃点検のみの処理。

#### 五 弦・チューニングピン・ピン板

(状態) 弦は、赤錆や黒錆、多くの断線が発生し、チューニングピンは茶色の錆が全体に及んでひどい状態であった。ピアノに使用される鋼鉄弦(ミュージックワイヤー)は、音域によって太さの違う弦を使用するが、当該ピアノは、マイクロメーターにて計測を行っても錆のために正確な直径が出せなかった。また、低音部に使用される銅巻弦は、これまでの断線などの際、太さ、長さを守らずに間に合わせの弦を取り付けてしまっていて、弦サイズがかなりランダムにバラバラになっている状態であった。唯一、チューニングピンを埋め込んでいるピン板のみが縦目、横目数枚の板の張合わせ接着(カエデ、ブナ、マホガニー)の異状がなくしっかりとしていた。

(修理) チューニングピンは、スタインウェイオリジナル。サイズは七・二五(直径)×六〇mm(長さ)を使用。弦のサイズは、メーカーに問い合わせをしたが、製造当時の設計図が残っていないので正確には分からないとの解答であった。そのため、当該ピアノの鉄骨セクション別の弦割りと弦をループさせるヒッチピンの数と位置を元にしてコンピュータを使用し、スタインウェイの古いピアノと現代のピアノ各々数種の弦割り、張力等のフォームを作成した。その後、現代ピアノに近いもの、スタインウェイ製造番号五〇、〇〇〇番位のデータのもの二種類に絞って検討したが、最終的には、弦の断弦率が一番少なくなるように考慮し、それぞれの次高音から高音部にかけての張力が多い所を修正した新たなモデルケースを作成

ンとの相違点は、鍵盤とアクションの連結部分にある。現在のものは、鍵盤上にある真鍮製のキャプスタンがサポートを突き上げるのに対して、このピアノは、鍵盤とアクションが直結されたアクションである。長所は、接点部分が直結しているため、鍵盤の動きがロスなくアクションに伝えられること、短所は、鍵盤とアクションの取り外しがすぐに行えないため、技術調整作業が困難で多くの時間がかかることである。アクションの部材は、欠損、紛失が随所に見られ、他メーカーの部品も間に合わせにいろいろと使用されていた。弦を打弦するハンマー(羊毛)はフェルトが磨滅消耗し、ハンマーを巻き付けるためのハンマーウッドがむき出しになって、木で弦を打っている所もあった。鍵盤は、木材はある程度使用できる状態であったが、白鍵は剥れ落ち、欠け、また、セルロイドを貼ったり、いろいろな材料が入り混じっていた。

(修理) アクションのパーツはメーカーにもすでにストックはなく、紛失、欠損部分は、同部材のカエデ材の色あいの合う古い乾燥した部材を収集して、すべて一個一個現物に合わせて作成し、パーツから作り始めた。特に欠損の著しかったのは、ハンマーを突き上げるジャック(カエデ材)であった。サポートのスプリングは形状は何とか維持していたが錆が発生しており、弾性も失われていたので全てオリジナルに近いリン銅線に取り替えた。基本的な考え方として、アクションについても、また他の部分についてもなるべく新しくするのではなく、当時の姿に戻しつつ演奏上支障がこないようにと、矛盾する二つの問題のバランスを考慮して作業にあたった。ハンマーはこのピアノ独特のサイズであるため、現在のスタインウェイオリジナルハンマーがどうしても組み込めず、ハンマーメーカーに依頼

して、このピアノに付いていたハンマーを元に、幅、厚みを指定して新規製作をした。ハンマーフェルトは、スタインウェイ社の指定メーカー、レンナー製のフェルトを使用した。ハンマーウッドへの穴あけ、シャンクへの膠による接着は、弊社で全て行なった。鍵盤は、全て古いものは剥し、木部は長年の収縮によって実寸よりかなり幅が細くなっていたため、両脇に木材の補強を施した後、象牙鍵盤を貼り直した。鍵盤小口面は、かなりの欠損状態だったので、木材をすべて付け足し、厚みを揃えた後、アクリライトを貼った。黒鍵は、かなり摩耗していたが、その摩耗の状態から、このピアノに触れた多くの演奏者が存在したと、ピアノ製作からこれまでの、ピアノと人間の長い年月の歴史が感じられ、演奏上大きな問題はなにとの判断から、多少の補強のみで、あえて当時のままの黒壇材を残した。

#### 七 外装

（状態）外装の状態は、一の項目の親板の部分でも触れているが、全体に塗装面は、その殆どが剥げ落ちて木材の木目が見えるほどであり、また、ピアノの角々の木材欠損部分も数多くあった。

（修理）欠損部分の木部を埋め、一番表面にくる化粧板を一部貼り直して整え、古い塗装を一度剥し落してから、サンドペーパー処理を念に行なうて、ウレタン系の塗装にて黒色艶消し仕上で吹き付け塗装を行なった。

北海道小ピアノは、修復を担当したピアノ技術者たちの努力により製造当時の音色を甦らせることができた。そこで、平成四年一月一八日、一八六五年スタインウェイ・ピアノ修復記念茨城県立歴史館ミュージアムコンサートが、茨城県立歴史館講堂にて開催された。この会は、上記

して、北海道小学校四年生によるこの対面式は平成六年五月一日、平成七年四月二五日にも催された。

#### 五 茨城におけるピアノの普及

茨城県内の小学校や県立学校において、ピアノはどのように普及して来たのだろうか。明治時代から昭和二〇年までの状況をみよう。

明治二五（一八九二年）二月、茨城音楽研究会が土浦で開催され、去四日土浦町に於て、音楽教師として東京より聘された山崎亀吉氏開会の主旨及音楽上の演説及会主たる同地高等尋常の両小学校長の祝辞後、音楽の合奏あり（一）風琴清笛洋琴伴奏にて君が代、三千余万の唱歌（略）来会者は二百有余名地方には稀らしき盛会なりと記述されている。小学校長が出席していたので、会場にはこの地方の教員も参加していたものと思われる。洋琴（当時、ピアノは洋琴といわれた。）が伴奏に使用されたので、既に土浦にはピアノが存在していたのだろうか。

明治三六年、茨城県女子師範学校が開校した。この時、同校に赴任し音楽の担当をした牛尾源が、

その当時はオルガンだけでしたので、幾度か県庁に嘆願しましてやつとピアノを購入して頂きました処、それが大評判となりまして県下の先生方がかわる見学に見えられ、みなその音色のすばらしさに驚嘆され、そして羨望されたのを覚えております。

と回想しているように、明治期におけるピアノの存在価値がここからもうかがえる。ところで、同校のピアノであるが、明治四三年の女子師範学校と水戸高等女学校（現、茨城県立水戸第二高等学校、明治三三年創立）と

の修復作業と茨城県立歴史館の新規開館（平成四年一〇月三日）を記念するもので、第一部セレモニー、第二部演奏で構成された。第一部では、昭和七年の北海道小ピアノ購入時、北海道尋常高等小学校教頭であった沼尻茂が挨拶のなかで、当時のピアノに関する回顧談や修復の喜びを語り、会場の参加者に感動を与えた。また、北海道小ピアノの経歴、修復担当者による裏話が紹介された。第二部では、ピアニスト中村真由美、茨城県立水戸第三高等学校音楽科生徒の演奏があり、会場に復活したピアノの音色が響きわたった。

茨城県立歴史館ではこのコンサートの開催以後、北海道小ピアノを活用するために、毎年一回程度コンサートを開催している。

平成五年一〇月三日、歴史に親しむ会（出演、ピアニスト川染雅嗣）が茨城県立歴史館講堂にて開催された。

平成五年一〇月二五日、北海道市の市民会館において里帰り記念コンサート（出演、ピアニスト川染雅嗣）が開催され、修復されたピアノの伴奏で、北海道小学校の児童の合唱、北海道市民のコーラスも行われた。

平成六、七年度も歴史に親しむ会が茨城県立歴史館講堂にて、以下のように開催された。平成六年九月二五日（出演、ピアニスト戸部典子）、平成七年二月四日（出演、ピアニスト豊田あい子、フルーティスト大竹泰夫、ピアニスト江幡和）、平成七年六月二四日（出演、ピアニスト長松谷幸生、ピアニスト山口泉恵）に開催された。

また、北海道小ピアノと北海道市立北海道小学校との交流が、ピアノ修復を契機に生まれた。平成五年五月一三日、同校の四年生が遠足で茨城県立歴史館を訪問し、「スタインウェイピアノとの対面式」を旧北海道小学校本館内のピアノ展示室で実施した。そして、同校の校歌が北海道小ピアノで久しぶりに伴奏され、児童の歌声が展示室内に響いた。そ

の分離独立により、女子師範学校の所有となったという。一説によるとそのピアノは、明治四〇年頃、生徒の寄付金によって購入したものだという。その後、ピアノが無くなったために音楽の授業にも不便を来すので、同窓会の幹事たちによって新しいピアノが購入されたところ。このピアノの動向については、不明であるという。

明治三八（一九〇五年）、君島尋常高等小学校（現、稲敷郡阿見町立君原小学校）で洋琴を購入している。同校の『学校沿革誌』には、「此年六月寄附金百七拾四円五拾銭ヲ以テ理科器械及洋琴等ヲ購入シタリ」と記録されている。同校には、『学校沿革誌』以外の史料が見当たらないが、この洋琴は、茨城県内の小学校におけるピアノの初期の導入と思われる。

大正一〇（一九二一年）三月七日、沼前尋常高等小学校（現、東茨城郡茨城町立沼前小学校）に川崎銀行頭取川崎八右衛門（現、茨城町海老沢出身）が、金一、一〇〇円を出してアップライトピアノ一台を寄贈した。当時ピアノの設備のある学校は、男女師範学校と沼前尋常高等小学校のみで、教生が多く来校したという。また、その時六年生であった勝山権次郎の「勝山回想記」には、

午後の体操の時間だった。裏の校門より大きな木箱を積んだ荷馬車が入って来た。箱にはピアノと書いてあった。荷馬車に丸通と書いてあった。先生は、ピアノだ！ピアノだ！と叫んで職員室に駆け込んだ。それは川崎家より寄贈されたもので、県内では三番目のピアノと知った。ピアノにはNEWYORKと書いてあった。それより沼前小学校では、唱歌の発表会などが何回も開かれ、七ツの子・夕やけ小やけ・旅がらす・月の砂漠などの唱歌・童謡などが歌われたとある。

大正一一年四月三〇日、茨城県立土浦高等女学校（現、茨城県立土浦第二

二高等学校 尚綱同窓会は、二〇〇〇余円を醸出して、母校の創立二〇周年記念式でピアノ一台を寄附した。同日、ピアノ披露の音楽演奏会が開催され、宇佐美ため子が演奏した。

大正一二年五月一日、水戸高等学校に東京音楽学校からグランドピアノの払い下げがあった。

大正一二年七月一日、若柳尋常小学校(現、下妻市立勝波ノ江小学校)にラクトー株式会社主催の「日本童謡の国際運動」懸賞で一等賞品のアップライトピアノが到着した。同校六年の荒井貞子が「母ちゃん」の作品でこの懸賞に応募し、野口雨情の推奨により一等に入選した。ところが、一等には四名があったので、六月二日同校の久保田半五郎校長が抽選により、賞品のドイツ・シュトゥットガルトのシードマイヤー社製ピアノ(価格一、六〇〇円)を当てた。荒井貞子は、ピアノ到着の一〇日程前に、両親のいる台湾に旅立っていた。同校は、数須小学校と合併し、勝波ノ江尋常高等小学校(現、下妻市立勝波ノ江小学校)となり、このピアノも同校の新校舎落成と共に移された。開校式には、野口雨情、本居長世(荒井貞子作詩「母ちゃん」の作曲者)と本居の娘(みどり、貴美子)を招き、盛大なピアノ披露式も開催された。荒井貞子は、大正一五年に台湾で本居親子と対面し、昭和七年には母校を訪れ念願のピアノと対面した。

大正一二年二月二〇日、茨城県立水海道高等女学校に購入したグランドピアノが到着した。十一月一日、同校海老沢教諭が東京へピアノ購入の件で出張とあり、購入は東京からと思われる。また、同校の第二回卒業生の永野格は、この時ピアノではじめて音楽を習ったと回想している。

大正一二年、横須賀海軍工廠に勤務していた飛田一政海軍主計特務少尉(現、水戸市大場出身)が、香典の一部は必ず母校に寄贈する記念品に

ある。しかし、外池万佐によれば、購入価格は二六〇〇円で、購入については一口一円で寄附を募り、六六〇人が参加し、三二八一円が集ったとある。

大正一三年、土浦尋常高等小学校(現、土浦市立土浦小学校)にグランドピアノが寄贈されたという。

大正一四年、笹目宗兵衛は母堂遠逝菩提のため、笠間尋常高等小学校(現、笠間市立笠間小学校)へ金一〇〇〇円を投じピアノを購入した。また、「笠間ピアノ試演」には、

笠間町小学校では二十六日ピアノ試演会開催本□女子師範校より小泉、寺門両教諭の「銀の波」の演奏あり尋常科二年女以上の児童も雲雀、桃太郎その他を合奏し盛会であったと記されている。

大正一四年七月二七日、下館尋常高等小学校(現、下館市立下館小学校)では、下館町の町費をもって三菱商會社からドイツ製ドゥエーゼンD型ピアノ(グランドピアノ)を二五〇〇円で購入した。同年二月六日、ピアノ披露を兼ねて児童唱歌会を開催した。この会は、女子師範学校の寺門教諭、小泉清氏及び寺門氏を水戸より招聘し、また下館高等女学校の稲村教諭も依頼して、独唱、ピアノ独弾及びバイオリン等の演奏があった。

大正一四年一月二五日、上市尋常小学校(現、水戸市立五軒小学校)では、校地を拡張し二階建校舎二棟を新築した。当時同校に勤務していた薄井義は、

いちばん北側二階校舎二棟完成のとき、学校後援会の特別寄付によって当時は県下でも稀であったグランドピアノが購入された。教室ドアが三尺であったので、男先生が総がかりでやっと室内に入れた。

という亡妻の遺言により横須賀海軍工廠の倉庫に眠っていたアップライトピアノを、各方面に働きかけ母校の大場尋常高等小学校(現、水戸市立大場小学校)に寄贈した。このピアノは、ドイツのグロトリアン・スタインウィヒ社で一八八六年製のもので、日露戦争の日本海海戦で戦ったバルチック艦隊の戦艦アリヨールに積まれていたものという。アリヨールは海戦後、舞鶴(京都府)に運ばれ、ピアノは舞鶴から横須賀に送られたらしい。このピアノは、水戸市立大場小学校に修復され、現存している。

大正一二年、茨城県立下館高等女学校(現、茨城県立下館第二高等学校)では、ドイツ・ベシュタイン社製のグランドピアノを購入した。音楽担当の謝花ちよの「世界的なピアノ ベシュタイン」には、

その頃学校にはピアノがないので購入することになりましたが加藤校長がどうせ購入するならば日本一のを買うことにしようと云われた(略)。東京の共益商社(山葉)との何回かの交渉でとにかく私に行って見てこいとので先輩の方同伴で見に参りました。すると何と幸せだったのでしよう。上野の母校にも御相談に参るつもりで上京したのですが、丁度音楽学校の教頭でいらっしゃる島崎赤太郎先生が偶然御出になっておりました。私は思わず走りよってその一部始終をお話いたしました。先生はそれならこれにしません。独乙からの直輸入品で、(略)すばらしいなりを聞きなさいと御自信でもうつとりとして御いででした。その美しい余韻のある音は、何とも云えぬ魅力でした。なお先生はこのピアノは今日日本では、音楽学校の奏楽堂と、地方ではたった一台広島の高師範にあるだけで、下館のような田舎の学校では勿体ないねとおっしゃって笑っておられました。

とある。このピアノは同校に現存している。購入価格は、六〇〇〇円と

と回想している。

大正一四年、鉾田尋常高等小学校(現、鹿島郡鉾田町立鉾田小学校)では、ピアノ(一〇〇円)を購入した。

大正一五年二月六日、高松尋常高等小学校(現、鹿嶋市立高松小学校)では、職員並に学務委員の努力により有志醸金でピアノ一台を四五〇円で購入した。

大正一五年五月一日、茨城県立竜ヶ崎高等女学校(現、茨城県立竜ヶ崎第二高等学校)では、創立一〇周年記念事業として独逸シドマイヤ社より直輸入のグランドピアノ一台を購入した。

昭和三年七月二三日、三の丸尋常高等小学校(現、水戸市立三の丸小学校)で、ピアノを購入した。宮田福次郎の「往年の三の丸を偲ぶ」には、水戸市には、一台もピアノが無かったので三の丸でひとつピアノを購入しようということになった。つまり三年計画で後援会費を蓄積することにした。一年積んでその次の年、役員会でこの問題を取り上げて寄付を募って、町内の代表者が集まり各町内に割り振りをした。集まった金額は千六百元、それでピアノを東京へ買いに行きドイツ製のベシタイン式(演奏用)のピアノを千三百円で買ってきた。スタンドピアノが五百円位で買ったのだから素晴らしいものだった。ピアノを持っていたのは下館と土浦の高等女学校にしかなかったのだからすごかった

と記録されている。

昭和三年五月、茨城県岩井実科高等女学校(現、茨城県立岩井高等学校)では、稲葉賢介校長の教え子等の篤志家よりピアノ一台の寄贈があった。昭和三年二月二四日、古河町男子尋常小学校(現、古河市立第二小学校)では、金七三円余をもってピアノ一台を購入した。

表 県有財産登録ピアノの推移

| 和 暦    | 台 数 |
|--------|-----|
| 昭和 2 年 | 7 台 |
| 3      | 8   |
| 4      | 8   |
| 5      | 8   |
| 6      | 12  |
| 7      | 14  |
| 8      | 14  |
| 9      | 15  |
| 10     | 20  |
| 11     | 21  |
| 12     | 23  |
| 13     | 24  |
| 14     | 27  |
| 15     | 27  |
| 16     | 29  |
| 17     | 29  |
| 18     | 29  |
| 19     | —   |
| 20     | —   |
| 21     | 20  |
| 22     | —   |
| 23     | 20  |

\* 各年『茨城県会決議録』『茨城県有財産表』より作成。  
昭和 20, 22 年は記載を欠く。

昭和四年、太田尋常高等小学校<sup>(94)</sup>(現、常陸太田市立太田小学校)では、有志の寄附によりピアノ二台を購入した。また、昭和五年、「太田小学校ではじめてピアノにより歌を唱う<sup>(95)</sup>」とある。

昭和四、五年頃、茨城県下妻実科高等女学校<sup>(96)</sup>(現、茨城県立下妻第二高等学校)へ、平井文三がスタンドピアノを寄贈した。また、同校の教諭であった東ヶ崎要市の談話によると、「昭和五、六年頃、下妻町出身で在京の実業家平井文三がピアノ(当時の金で約一〇〇〇円)を寄付した。當時下妻ではどこにもピアノはなく、見たこともない人が殆どであり、教職員生徒一同大喜びで、高良先生がピアノを弾いて盛大に披露会を行った<sup>(97)</sup>」という。

昭和五年、茨城県立竜ヶ崎高等女学校<sup>(97)</sup>で創立一五周年記念として、講堂用及び生徒用ピアノを購入した。

昭和七年九月、茨城県立水海道中学校<sup>(98)</sup>(現、茨城県立水海道第一高等学校)で、ピアノを購入した。メーカーはCHOPINであった。

昭和七年二月一日、水海道尋常高等小学校<sup>(98)</sup>(現、水海道市立水海道小学校)でグランドピアノ(前述の水海道小ピアノ)を購入した。

昭和九年、新治郡新治村出身の水戸市柵町洋服商玉造竹次郎が新治小学校<sup>(99)</sup>(現、新治郡千代田町立新治小学校)にピアノ(二〇〇〇円)の寄附を申し出た。

昭和一〇年七月六日、取手尋常高等小学校<sup>(100)</sup>(現、取手市立取手第一小学校)では、七六〇円でピアノを購入した。費用は、校舎増築記念校具設備寄附金(総額四五五五円)から支出された。

昭和一二一年六月一三日、七郷尋常高等小学校<sup>(101)</sup>(現、岩井市立七郷小学校)では、ピアノ披露唱歌会が開催された。なお、購入については、児童が毎月一銭の寄附による教育後援会費による。

と記載されている。学校名については、記事からは不明である。

昭和一九年、「母校へピアノ」の記事が『茨城新聞』に掲載された。

鹿島郡新宮村大字大竹出身の直喜じゅん(六〇)は目下川崎市に〇〇工場を経営してゐるがこの程母校である新宮東国民学校へピアノ一台□額参千圓の篤志寄附をされたので方波見校長以下全職員は非常に感激、□感教育と情操陶冶に万全を期してゐる

この記事にある新宮東国民学校は、現在の鹿島郡銚田町立大竹小学校で、同校によれば八月に寄贈され、アップライトピアノであったという。

昭和一九年四月、岩瀬国民学校<sup>(102)</sup>(現、西茨城郡岩瀬町立岩瀬小学校)に転入した大河内和子は、東京から前月疎開し、その時にピアノも持参したという。当時、同校にはピアノはなく、このピアノを学校でも使用し、戦後、東京へ帰る時、ピアノを同校へ寄贈したという。

また、昭和一九年、東京の戸山国民学校<sup>(103)</sup>(現、新宿区立戸山小学校)の五、六年生が柿岡国民学校<sup>(104)</sup>(現、新治郡八郷町立柿岡小学校)に疎開し、この時、東京からグランドピアノが運ばれてきた。加藤紀夫<sup>(105)</sup>によれば、ピアノは二台(グランドピアノとアップライトピアノ)で、柿岡国民学校と柿岡第

昭和一三年五月、金子裕が外国製ピアノを志筑尋常高等小学校<sup>(106)</sup>(現、新治郡千代田町立志筑小学校)に寄贈した。

昭和一三年、関本尋常高等小学校<sup>(107)</sup>(現、真壁郡関城町立西小学校)では、館野貞吉からグランドピアノが寄贈された。ピアノは、同校の講堂が完成したのを記念し、東京ヤマハ楽器店から四八〇〇円で購入したものであった。ピアノの披露会には、東京から舞踊家の石井渙やピアニストなどを招いたという。また、同校では、昭和一九年の頃、真壁郡伊讃村<sup>(108)</sup>(現、下館市の農家に疎開していたピアノ)を譲り受け、低学年の音楽の授業に駆使したという。

昭和一四年、茨城県立日立高等女学校<sup>(109)</sup>(現、茨城県立日立第二高等学校)では、日立製作所からグランドピアノが寄贈された。

昭和一四、五年頃、平磯尋常高等小学校<sup>(110)</sup>(現、東茨城郡大洗町立平磯小学校)でピアノを購入した。

昭和一八年九月二七日、麻生国民学校<sup>(111)</sup>(現、行方郡麻生町立麻生小学校)では、麻生町出身の橋本房吉より寄贈されたピアノ(二七〇〇円)の初弾奏を兼ねた音楽大会を開催した。

昭和一九年、潮来町では、町民の貯金によってピアノ購入を進めた。その様子が、『茨城新聞』に

真心中で購うピアノ

つもり貯金学校へ寄附

行方郡潮来町では大久保町長就任以来毎月八日大詔奉戴日を□□感謝日と定め、この日は全町民が茶菓、煙草、酒等を一切廃止食ったつもり飲んだつもりでその金額を学校設備費に寄附することを申合せ実践しつゝあったが町民の赤誠積り積つて万を呼ぶに至つたので三千余円を以てピアノ一台を購入設備することになった

二国民学校(元、新治郡八郷町立片野小学校。昭和四七年柿岡小学校と統合で使用したという。

昭和二〇年、鹿島郡白鳥東国民学校<sup>(112)</sup>(現、鹿島郡大洋村立白鳥東小学校)に疎開した児童の飯田陽一、飯田恵美子の父飯田計三からピアノ一台その他学用品代合計一万円の篤志寄附の申し込みがあった。

昭和一〇年代、磯浜尋常高等小学校<sup>(113)</sup>(現、東茨城郡大洗町立磯浜小学校)に町の有志からピアノが寄贈された。

この他、購入・導入年は不明であるが、戦前に学校でピアノが使用されていた事例は、筆者の調査では、茨城県立太田第二高等学校<sup>(114)</sup>、茨城県立結城第二高等学校<sup>(115)</sup>、水戸市立常磐小学校<sup>(116)</sup>、水戸市立浜田小学校<sup>(117)</sup>、水戸市立城東小学校<sup>(118)</sup>、日立市立助川小学校<sup>(119)</sup>、ひたちなか市立湊第一小学校<sup>(120)</sup>、ひたちなか市立湊第二小学校<sup>(121)</sup>、石岡市立高浜小学校<sup>(122)</sup>、久慈郡大子町立大子小学校<sup>(123)</sup>、真壁郡真壁町立真壁小学校<sup>(124)</sup>などがある。(いずれも現在の名称である。)

昭和期の音楽会や音楽教育の情報を探してみると、次のようなものがある。

昭和一一年一月八日、第一回茨城県下女子中等学校聯合演奏会が、水戸市の茨城会館において開催された。参加校には、太田、龍ヶ崎、古河、助川、女子師範、水戸、水戸第二、水戸市立、下館、土浦、常磐の学校名がみられる。

昭和一四年一〇月八日、茨城県教育音楽研究会の第一回総会<sup>(125)</sup>が開催された。同会は、小学校音楽教育の正常なる発達振興を図り、時局下における児童の音楽による情操教育に一段の熱と徹底を示すことを目標に、県内有志一〇〇名余で構成されていた。

昭和一四年一二月二六日には第一回県下小学校児童唱歌会、昭和一

五年一月二四日には県下小学児童音楽大会<sup>(13)</sup>、昭和十六年一月二三日には国民学校制度実施記念県下児童音楽大会が開催された。

筆者の調査ではピアノの所蔵について判明できなかった学校のうち、これらの音楽会に参加した学校にもピアノが存在したものと思われる。

茨城県の県有財産として登録されたピアノ（購入価格五〇〇円以上の重要な器具の類）の昭和二年から昭和三年までの台数の推移（表）をみると、年々ピアノ台数の増加が見られ、同一年からは総数が二〇台以上になっている。県有財産ピアノの具体的な所蔵先は不明であるが、県立学校が多いものと思われる。また、茨城県内の小学校におけるピアノの台数の変化も、前述のように、寄付、会費や募金などの購入・導入が多いが、昭和初期からの増加がみられる。また、小学校や県立学校での音楽教育の発展、音楽指導者の増加も台数増の一因であろうか。さらに、昭和十九年から二十一年にかけて台数が減少しているのは、戦災による焼失の事例があるので、そのための減少も含まれるものと思われる。

## 五 まとめ

北海道小ピアノについて、製造から約一三〇年に及ぶ来歴をまとめてみると、次のようになる。

一 一八六五年の製造である北海道小ピアノで使用されているピアノアクションのメカニックは、現在のピアノの源流に位置するものといえる。ピアノ製造史の上からも、注目すべきピアノといえよう。

二 明治四年に日本に輸入されたピアノであることは、洋楽が導入され始めた時期のピアノの状況、近代日本の文明開化を証明する資料としても貴重である。しかし、その実体は解明されていないので、文化史や

音楽史の観点からも、今後の史料調査が必要である。

三 ピアノが、昭和七年に茨城県西部の北海道町の小学校に導入・活用されていたことは、茨城の学校教育や音楽教育の歩みをたどる資料としても貴重である。ところで大正年間に、茨城県内、特に県西地方で童謡運動を推進していた野口雨情は、大正二年六月、同一年五月に北海道尋常高等小学校で講演をした。また、同校には、茨城童謡会の事務局が置かれ、同会の機関誌『つばめ』が発刊された<sup>(14)</sup>。この童謡運動が、北海道尋常高等小学校でのピアノ購入の背景にあったのであろうか。北海道地域の歴史を考察する上で、課題の一つともいえよう。

史料調査に当たっては、北海道市立北海道小学校、北海道市教育委員会、北海道市立図書館、茨城県立北海道第二高等学校、東京芸術大学音楽研究センター、松尾楽器商会の各関係学校及び機関、沼尻茂、椎名四郎、柴良助、河田文子、亀山和夫、高原とく、松本ゆり子、臼井英男、秋山千賀子、郡司すみ、故中村理平、松本雄二郎、松山陸郎、塚原康子の各氏にご協力、ご教示をいただいた。ここに記して御礼申し上る。

## 註

- (1) 平成五年一〇月二日、茨城県立歴史館主催の歴史教室で、「洋楽導入期輸入ピアノの軌跡」のテーマで行った。
- (2) 平成四年一〇月一八日、スタインウェイピアノ修復記念コンサート。平成五年一〇月二五日、里帰り記念コンサート
- (3) 『洋琴ピアノものがたり』近代芸術社、昭和六一年、九九ページ
- (4) 『茨城県の不思議事典』新人物往来社、平成七年、三二―三三ページ
- (5) 昭和四十九年九月四日付『読売新聞』。昭和四十九年二月二五日付『東京中日スポーツ』。昭和四十九年一月九日付『夕刊フジ』。平成四年一月二二日付『新しいはらき』新聞
- (6) 『日本ピアノ文化史』第一回―第一四回、『音楽の世界』一九八二年一〇月号―

一九八四年二月号

- (7) 『楽器の王・ピアノ 日本のピアノ』(一)―(九)、『音楽の友』一九七六年一月号―一九七六年一〇月号

- (8) 『洋楽導入期におけるピアノの受容をめぐる』『東京藝術大学音楽学部東京藝術大学大学院音楽研究科楽理科卒業論文音楽学専門課程修士論文要旨昭和六三年度』東京藝術大学音楽学部楽理科、一三ページ

- (9) 『明治期西洋音楽事情』『大阪音楽大学音楽研究所年報 音楽研究』大阪音楽大学音楽研究所、第二号、一九九四年

- (10) 前掲(3)

- (11) 『西洋からきた楽器ピアノは語る』エビック社、一九九三年

- (12) 『ペヒシュタイン物語』南斗書房、一九九三年

- (13) 『ピアノの歴史』音楽之友社、一九九四年

- (14) 『ピアノの誕生』講談社、一九九五年

- (15) 『楽器の事典ピアノ』東京音楽社、昭和五十七年。同書には、改訂版『楽器の事典ピアノ』東京音楽社、平成二年がある。

- (16) 増井敏二『データ・音楽・にっぽん』民主音楽協会、昭和五五年、一五、二八、二九ページ

- (17) 『熊谷五右衛門義比とシーボルト 特に日本最古のピアノについて』熊谷美術館、昭和四二年

- (18) 『ステッセルのピアノ』文藝春秋、一九九三年

- (19) 常盤村立大場小学校『甦える音色 グロトリアン』、平成元年。前掲(18)「水戸のグロトリアン」、二四―二六二ページ

- (20) 一八六五年の製造、一八七一年の購入・輸送に関する情報は、松尾楽器商会の問合せに対するアメリカのスタインウェイ&サンズ社からの回答（一九九二年四月七日付）による。また、スタインウェイ&サンズ社の歴史については、高城重躬『スタインウェイ物語』ラジオ技術社、昭和五三年を参照されたい。

- (21) 前掲(5) 昭和四十九年九月四日付『読売新聞』

- (22) 前掲(5) 昭和四十九年一月九日付『夕刊フジ』

- (23) 海老沢有造『洋楽伝来史』日本基督教団出版局、一九八三年。竹井成美『ザビエルが伝えた祈りの歌 南蛮音楽その光と影』音楽之友社、一九九五年

- (24) 『梅園全集』上巻、梅園会、大正元年、一〇六六ページ。前掲(6)「日本ピアノ

文化史」第二回「シーボルト」、一九八二年一月号、六六ページ。海老沢有造『洋楽伝来史』日本基督教団出版局、一九八三年、一七九ページ

- (25) 『梅園全集』下巻、梅園会、大正元年、六八四ページ

- (26) 池田政敏『江戸のピアノ 浦賀の黒人バンド』『日本歴史』、昭和二十九年三月号、四七―四八ページ

- (27) 『長崎市史 風俗編上』大正一四年、三五―三六ページ

- (28) 前掲(17)。属啓成「シーボルトのピアノ」『遍歴の音』音楽之友社、昭和四七年。金井圓「カッポレ異聞」『地誌と歴史』東京印書館史誌センター、第四号、一九七五年、四―五ページ

- (29) 前掲(26)池田、四七―四八ページ。塚原康子『一九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版、一九九三年、一九ページ。呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』(復刻)、名著刊行会、昭和五四年、一七―一七六、八六二―八六三ページ

- (30) 前掲(29)塚原には、「江戸参府に携行したピアノが熊谷に贈られたピアノ」とある。四二―四三ページ

- (31) 平岡雅英『ゴンチャロフ 日本旅行記』東潮社、昭和三九年、一七七―一七八ページ

- (32) 本稿では、開国以後を近代における洋楽の導入の始期とし、主に次の研究を参考にした。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』日東書院、昭和六年。堀内敏三『音楽五十年史』講書房、昭和一七年。樋口昭『近代日本の洋楽受容を探究する(一)―(五)』『春秋』春秋社、一九八二年五月号―一九八三年三月号。増井敏二『日本のオペラ―明治から大正へ』民音音楽資料館、昭和五九年。升本匡彦『横浜ゲーテ座―明治・大正の西洋劇場―第二版』岩崎博物館出版局、一九八六年。玉川裕子『明治日本と西洋音楽―制度史からみた「美的受容」の成立―』『比較文学・文化論集』東京大学比較文学・文化研究会、第三号、一九八六年。柴田南雄『日本の音を聴く(増補新版)』青土社、一九八七年。中村洪介『西洋の音 日本の耳』春秋社、一九八七年。中村理平『洋楽導入者の軌跡―日本近代洋楽史序説―』刀水書房、一九九三年。前掲(29)塚原『一九世紀の日本における西洋音楽の受容』。安田寛『唱歌と十字架 明治音楽事始め』音楽之友社、一九九三年。大塚野百合『讃美歌・聖歌ものがたり―疲れしころをなぐさむる愛よ』創元社、一九九五年。

また、個別の楽器の導入・普及については、次の研究を参考にした。松山善三『日本のヴァイオリン近代史Ⅰ』『研究紀要』東京音楽大学、第九集、一九八四年。赤井勘『オルガンの文化史』青弓社、一九九五年。

- (33) 鳥居民『横浜山手 日本にあった外国』草思社、一九七七年、七二―七三ページ
- (34) 「竹口喜左衛門信義日記」『ヘボンと横浜』横浜開港記念館昭和五十八年度特別展情報ファイル所収、一二ページ、
- (35) 斎藤龍『横浜・大正・洋楽ロマン』丸善、平成三年、六八ページ
- (36) 前掲(29) 塚原、二四八―二四九ページ。A・B・ミットフォード『英国外交官の見た幕末維新』新人物往来社、昭和六〇年、一五ページ
- (37) 属啓成『グラフィックピアノの歴史』音楽之友社、昭和六一年、一五八ページ
- (38) 前掲(16) 増井、二九ページ。前掲(29) 三浦『本邦洋楽変遷史』、一〇一ページ。前掲(29) 堀内『音楽五十年史』、八〇ページ。青柳善吾『本邦音楽教育史(改訂新版)』昭和五四年、八〇―八一ページ。前掲(6) 堀『日本ピアノ文化史』第三回「開国期」、一九八二年二月号、二〇―二二ページ
- (39) 前掲(32) 升本、一五ページ
- (40) 前掲(35)、六八ページ
- (41) 前掲(26)、四七ページ
- (42) 松山岩根『日本に於けるヴァイオリンの製作』『音楽界』、明治四三年一月。秋山龍英『日本の洋楽百年史』第一法規出版、昭和四一年、二二三―二三四頁所収
- (43) 前掲(29) 塚原、二六〇ページ。萩原延寿『遠い崖 サトウ日記抄』、昭和六一年五月三日付『朝日新聞』夕刊、一四一四回。同『遠い崖 サトウ日記抄』、昭和六一年五月二〇日付『朝日新聞』夕刊、一四一九回。
- (44) 小野健一『古ピアノ追跡―明治音楽史の一資料―』『比較文化研究』、東京大学教養学部、第一六輯、一九七七年、一五六―一六〇ページ
- (45) 『東京芸術大学百年史』東京音楽学校編 第一巻『音楽之友社』
- (46) 『THE JAPAN HERALD』August 27th 1864
- (47) 『THE CHRONICAL & DIRECTORY FOR CHINA JAPAN & THE PHILIPPINES FOR THE YEAR 1868』二四八―二五〇頁
- (48) 『The Japan Weekly Mail』一八七一年八月二六日
- (49) 『The Japan Gazette Hong List and Directory for 1872』二九ページ
- (50) 『北海道史 下巻』昭和六〇年、五九―六三ページ
- (51) 柴沼三郎『後援会の生ひ立ち』『会報』北海道小学校教育後援会、創刊号、昭和九年、五九―六三ページ
- (52) 北海道町小学校教育後援会『会誌』昭和七年四月起、北海道市立北海道小学校

お、茨城県師範学校では、いつピアノが導入されたのか筆者の調査では不明であるが、明治四四(一九一一年一月一日)に第四回音楽演奏会(『音楽界』第四号、明治四四年二月、五三―五四ページ)が開催され、ピアノ独奏片岡龜雄教諭もあったので、これ以前の導入と思われる。

- (73) 阿見町立君原小学校『阿見町立君原小学校創立百周年記念誌 きみはら』昭和五四年、一五三ページ
- (74) 茨城町立沼前小学校『百年の歩み』昭和五〇年、三七ページ。
- (75) 『茨城町史 通史編』平成七年、六〇―六四ページ
- (76) 茨城県立土浦高等学校『尚綱同窓会報』第一号、大正一一年四月、四七―四八頁。『尚綱同窓会報』第二号、大正一四年二月、四一―四二ページ。
- (77) 『楽器台帳』東京芸術大学所蔵
- (78) 若柳小学校『編蝠の唄』復刻会『若柳小学校童謡選集 編蝠の唄 復刻のしおり』地出版社、一九七六年、五ページ。『若柳小学校童謡選集 編蝠の唄』(大正一一年発行の復刻版、昭和五一年刊)に添付されたしおり。中山崇編著『勝波ノ江の教育』下妻市立勝波ノ江小学校、昭和五七年、五九―六二ページ。『下妻市史 下』平成七年、三〇七―三〇八ページ
- (79) 茨城県立北海道高等学校校友会『絹の流れ』第二巻第三号、大正一三年三月二二日、六七―六八ページ。茨城県立北海道第二高等学校『御城』昭和五六年、三二―三三ページ
- (80) 前掲(18) (19)。水戸市立大場小学校(前) 東茨城郡常陸村立大場小学校。平成三年から水戸市立となる。所蔵のピアノは、昭和六三年から平成元年まで修復がされ、平成元年五月一日に修復記念演奏会が開催された。また、平成六年二月一日から同年三月二〇日まで、水戸市立博物館で開催された特別陳列「伝説のピアノ」において、このピアノが展示された。
- (81) 茨城県立下館第二高等学校『創立六〇周年記念誌』昭和三八年、七―九ページ
- (82) 茨城県立下館第二高等学校『七〇年の歩み 創立七〇周年記念誌』昭和四七年、一三―一四ページ
- (83) 土浦市立博物館からの教示による。なお、土浦市立博物館第一六回企画展「青い目の人形」のパンフレットに、土浦幼稚園の人形歓迎会の写真が掲載され、その写真にランドピアノも写っている。三ページ。土浦幼稚園の人形歓迎会は、昭和二年四月二九日、土浦尋常高等小学校で開催された。

## 所蔵

- (53) 北海道町役場『庶務関係綴』昭和七年一月、北海道市役所所蔵
- (54) 北海道尋常高等小学校『昭和十年度本校経営之実態』昭和一〇年、北海道市立北海道小学校所蔵。なお、資料2のプログラムも(54)に綴られている。
- (55) 前掲(54)。金の鈴合唱団の写真は、亀山和夫・石岡市所蔵。この写真には、北海道尋常高等小学校関係では、金の鈴合唱団員の他に、四列目右から教頭沼尻茂と校長亀山亀之助、左側ピアノ寄りに金の鈴合唱団の指導をしていた訓導片野次郎平(指揮)と訓導河田照子(伴奏)、北海道高等女学校関係では、三列目右から教諭萩原春野と教諭太田緑、後列に一〇名の生徒が写っている。撮影場所は、北海道尋常高等小学校の講堂である。
- (56) 『音楽教育に対する所感の一端』、前掲(51)、四二―四三ページ
- (57) 「職員室の話題」、前掲(51)、四五ページ
- (58) 昭和一〇年三月一六日付『東京朝日新聞』茨城版
- (59) (60) 前掲(54)に綴られている。
- (61) 茨城県立北海道高等学校『学校たより』第一五号、昭和一一年三月二〇日、五一―五六ページ
- (62) 昭和一〇年代の唱歌講習会関係の情報は、北海道尋常高等小学校『沿革誌 第二号』(昭和一一年度―昭和十八年度)による。
- (63) 猪瀬嘉造『北海道小学校沿革誌』(私家版、昭和五九年)。なお、昭和二一年二月一四日の記述については、北海道小学校『沿革史』第三号、(昭和二一年度―昭和六〇年度)による。
- (64) 昭和二二年八月三日付『茨城新聞』
- (65) 『茨城教育時報』第二二巻第二一・二合併号、昭和三五年一月一〇日
- (66) 昭和四九年度起、北海道小学校所蔵
- (67) 『茨城県歴史館だより』第七号、一九七六年六月一〇日
- (68) 松尾楽器商會作成資料
- (69) 拙稿『茨城におけるピアノの普及の諸相』『茨城史林』第一九号、平成七年、七九―九二ページを参照されたい。
- (70) 『音楽雑誌』第二十七号、明治三五年二月二五日、二四―二五ページ
- (71) 清芳会『清芳』復活五周年記念号、昭和三四年、二〇―二二ページ
- (72) 茨城県立水戸第二高等学校『水戸二高七十年史』昭和四五年、四〇―四二頁。な

- (84) 笠間郷友会『笠間郷友会々報』第拾四号、大正一四年五月一五日、三七―三九ページ
- (85) 大正一四年五月二六日付『いはらき』新聞
- (86) 『下館尋常高等小学校沿革誌』下館市立下館小学校所蔵
- (87) 水戸市立五軒小学校『百年の歩み』昭和四八年一月一〇日、二五―二六ページ
- (88) 鉾田町立鉾田小学校『鉾田小学校創立一〇〇周年記念誌 あゆみ』昭和四九年、三〇―三二ページ
- (89) 『鹿島町史 第四巻』昭和五九年、一三九―一四〇ページ
- (90) 茨城県立龍ヶ崎第二高等学校『龍峯五十年』昭和四三年、一八―一九ページ
- (91) 水戸市立三の丸小学校『百年史』平成四年、三〇―三一ページ
- (92) 茨城県立岩井高等学校『創立五〇周年記念誌 双峰五十年』昭和五四年、一七―一八頁
- (93) 古河市立第二小学校の『沿革史』によれば、昭和三年二月二四日に購入とある。なお、杉原弘修『新聞記事に見る栃木の戦前音楽史』『研究紀要』第二号、宇都宮短期大学、一九九五年、一六四―一六五ページには、昭和三年八月二四日に購入という「下野新聞」の記事が掲載されている。
- (94) 太田尋常高等小学校『学校沿革誌』
- (95) 『常陸太田市史 通史編 下巻』昭和五八年、一〇九―一〇八ページ
- (96) 茨城県立下妻第二高等学校『同芳 創立八十周年記念誌』平成元年、一五、二四―二五ページ
- (97) 前掲(90)、一九ページ
- (98) 茨城県立北海道第一高等学校『済美 創立八十周年記念誌』平成元年、一五、二四―二五ページ
- (99) 昭和九年一月二七日付『いはらき』新聞
- (100) 「昭和一〇年六月 取手尋常高等小学校校舎増築記念校員設備寄附金収支簿」『取手市史 近現代史料編Ⅱ』平成二年、五四―五五九ページ所収
- (101) 『七郷村報』第三号、昭和二年六月二二日、二二ページ。『岩井市史 資料近現代編Ⅱ』平成五年、一七〇―一七一頁所収
- (102) 『七郷村報』第四四号、昭和二五年二月二二日、一―二頁。前掲(10)『岩井市史 資料近現代編Ⅱ』、二四五―二四六頁所収
- (103) 千代田村立志誠小学校『写真で見る学校百年史』昭和四九年、二四―二五ページ
- (104) 関城町立西小学校『百年のあゆみ』昭和五〇年、三四―三五ページ

- (105) 前掲(104)、九ページ
- (106) 茨城県立日立第二高等学校からの回答による。
- (107) 那珂湊市平磯小学校『創立百周年記念誌 観瀾』昭和五〇年、四七ページ
- (108) 昭和一八年九月三〇日付『茨城新聞』夕刊
- (109) 昭和一九年一〇月一八日付『茨城新聞』
- (110) 昭和一九年一〇月二五日付『茨城新聞』
- (111) 岩瀬町立岩瀬小学校『創立百周年記念誌 百年のあゆみ』昭和五〇年、一一三ページ
- (112) 八郷町立柿岡小学校『百年』昭和五〇年、一七ページ
- (113) 加藤紀夫「戸山国民学校集団疎開記」『八郷町民文化誌 ゆう』三号、一九九四年、三三—三六ページ
- (114) 昭和二〇年二月二三日付『茨城新聞』
- (115) 東茨城郡大洗町立磯浜小学校『創立九十五年』昭和四三年、五九ページ
- (116) 茨城県立太田第二高等学校『太田二高七〇年のあゆみ せいほう』昭和六一年、二八ページにピアノの写った写真が掲載されている。
- (117) 茨城県立結城第二高等学校『創立八〇周年記念誌 八〇年のあゆみ』平成五年、九ページにピアノの写った写真が掲載されている。
- (118) 水戸市立常磐小学校『百年のあゆみ』昭和四八年、四六ページ
- (119) 水戸市立浜田小学校『はまだ 創立一〇〇周年記念誌』昭和四八年、五八ページ
- (120) 筆者調査による。
- (121) 筆者調査による。
- (122) 前掲(107)、四七ページ
- (123) 石岡市立高浜小学校『創立百周年記念 かり草』昭和四八年、三八、六七—六八ページ
- (124) 昭和二〇年二月二三日付『茨城新聞』
- (125) 筆者調査による。
- (126) 筆者調査による。
- (127) 『茨城教育』第六二七号、昭和二一年二月号、九六—九八ページ
- (128) 『茨城教育』第六六三号、昭和二四年二月号、八六—八八ページ
- (129) 『茨城教育』第六六三号、昭和二四年二月号、九七—九八ページ
- (130) 『茨城教育』第六七三号、昭和二五年一〇月号、八六ページ
- (131) 『茨城教育』第六八七号、昭和二六年二月号、七六—七七ページ
- (132) 茨城県内の県立学校で戦災によるピアノの焼失の事例として、以下があげられ

る。前掲(72)、一八七ページ。茨城県立日立高女昭和一八年入学生会の会「十四歳の戦争」一九九〇年、五二、一九四、二二二、四〇三、四〇八ページ

(133) 前掲(50)「水海道市史年表」、四八八—四八九ページ

(134) 前掲(50)に、「大正一〇年六月、水海道小学校に事務局をおいた茨城童謡会が誕生し、雑誌『つばめ』を発刊した。」とあり、出典として羽田松雄「教員生活の回想」が記されている(二二三ページ)。しかし、羽田松雄「教育生活の回想」(筑波書林、一九八一年)には、「大正十一年六月には「茨城童謡会」が設立されて、機関誌『つばめ』の発行」とある(二九ページ)。また、羽田松雄「県下童謡教育会の残骸」『茨城教育』第五五二号、昭和五年八月号)には、茨城童謡会の出現は大正一〇年六月とある(一一〇ページ)。さらに、茨城童謡会の発会記念の写真が、『週刊てんおん』第五三〇号(昭和四〇年二月二八日)に掲載されている(七ページ)。この写真には、大正一一年四月、水海道小学校と説明がある。羽田松雄「童謡復興・その恩人たち(一)三星論の序として」『枯れすすき』第六号、昭和五四年一〇月二五日)にも、大正一一年六月の茨城童謡会の発会式の写真が掲載されている。(二五ページ)。石塚哲次郎「資料で語る茨城の教育遺産Ⅰ—常総の綴方・童謡教育運動—」(筑波書林、一九九〇年)には、「機関誌『つばめ』は、未だ発見されていない」とある(七〇ページ)。茨城童謡会の活動の調査や機関誌『つばめ』の発見も今後の課題である。